

# 複合動詞論序説

——とれたて・生まれたて——

工藤力男

## はじめに

九年前のことである。そのころ我が学部には、入学式翌日からのフレッシユマンキャンプで講演を行う慣例があった。その年は国文学科の番で、わたしが話をする巡りあわせになったので、おりしも放送中の朝のテレビ小説「春よ来い」を材料に、そこで用いられている日本語のあれこれについて話した。その話のあとだったかと思うが、時の文藝学部長、我妻建治氏から一つの疑問が呈示された。何か事がなされたばかりのことを「何々たて」と言うが、この「たて」を自動詞に付けるのは変ではないか、というのである。それについてわたしは考えたことがなくて即答しえなかった。

帰りのバスの中でも、「たて」を自動詞に付けては舌頭にまろばせて考えたが、遂に結論が出せないまま帰宅した。そして、近代の用例が充実しているので食卓わきに置いて重宝している『新潮現代国語辞典』(1986)を開くと、「たて【立て】」の項の「二(接尾)」の条に左記のように出ていた。

①動詞の連用形に付いて名詞となり、その動作が終わったばかりであることを表す。「たき」の飯(「へボン」)「卒業し」「坊つ」「ペンキ塗り」A

「たきたて」「塗りたて」は確かに他動詞に付いた例だが、「卒業する」は自動詞と解せられる。なんだ、漱石も自動詞に付けているではないか、と情けなくも納得してしまったのである。ところが、一昨年初、旧白洲邸「武相荘」を訪れたところ、展示品に添えられた白洲正子氏の文章が目にはいっ

た。

加藤先生から武相荘へは出来たてはやはやの御自身の器が比叡山を描いた美しい手紙と共に送られました。

我妻氏に突きつけられた質問が、突然、忘却の霧の中から浮かんできた。つづいて昨年七月、小田急の電車内の広告に「新しい液晶(ヘガ)シリーズ 生まれたてです。SONY」が出現した。そして今春、日本放送協会の番組に「とれたてマイビデオ」のあることを知り、五月十八日の『讀賣新聞』朝刊で「エーエム・ピーエムから『とれたて膳』新登場」という広告を見た。「とれたて」は最近いろいろな広告で流行のように用いられる。

このような偶目が重なったので、根底から考えなおそうと発表準備を進めていたおりしも、我妻建治(2004)に接した。昔わたしに突きつけた疑問について、氏自身の見解を述べたものである。我妻氏の出勤途中に「新鮮野菜」「とれたて」の幟を立てた野菜販売所があるが、「とれたて」では野菜の新鮮さが損なわれる、「とりたて」でなくてはならない、という趣旨である。氏は、「とれたて」が今日ひろく通用していることも指摘している。

本稿ではこれを、直後の意を表わすへ動詞+たてと形式

化する。そして、日本語の流れを上り下りしながら、その成立事情をさぐり、変遷過程をたどり、語性を明らかにして、我妻氏がいだいた違和感の根拠を考えたい。

資料の成立・刊行年はキリスト暦で、所在ページは「ロ」のあとに、ともにアラビア数字で表記する。辞書の引用の末尾に大文字のローマ字をゴチック体で付し、それを略号に用いることがある。言及箇所傍線・下線をつけることがある。

# 一

近代の辞書の説明を見ることから始める。まず落合直文編『ことばの泉』(1888)には、

動作の、今行ひたるばかりなる意を示すに用ゐる語。俗語。「煮たて」「買ひたて」。B

その三十年後の大槻文彦著『新編大言海』(1930)には、

動詞ト熟シテ名詞トナリ、其事ノ新ナル意ヲ云フ語。

「炭火ノオコリたて」「荒砥ノ研ギ立て」「煮たて」炊きたて「切りたて」生レたて C

最も新しい北原保雄編『明鏡国語辞典』(2003)には、

その動作が終わってまだ間がないことを表わす。「炊き

たての御飯」「できたてのほやほや」「結婚したての二人」D

とあって、その記述にほとんど差がない。「たて」に上接する動詞について、自他はおろか、なんらかの制限があるとは書いてないのである。A・B・Dには「動作」とあるが、Aの「卒業」、Dの「できる」がはたして「動作」と称しているか疑問で、「動詞で表現される事態」程度の意味なのだろうと思う。このように、多くの辞書の編著者はこの形式を詳細に記述しようとしてはいない。わずかに独自性が見える辞書は次に引く三省堂『新明解国語辞典』第四版(1988)である。

ある状態が出現したばかりであることを表わす。「焼き」の「パン」E

動詞とも動作とも書かずに「状態」とするこの記述によると、動作の有無、動詞の自他にかかわらず用いることになる。

つづけて、いま行われている十数点の辞書の接尾語「たて」の項に例示された、典拠を示さない当代語の用例、それに『広辞苑』第四版対応の『逆引き広辞苑』の掲出語を拾うと、左記のとおりである。

あげたて 入れたて 生まれたて\* 起きたて\* 買い

たて 聞きたて 切りたて 汲みたて 結婚したて\*  
炊きたて 搗きたて 作りたて 付けたて 出たて\*  
できたて\* 研ぎたて 取りたて とれたて\* 成りたて\*  
煮たて 塗りたて 掃きたて 吹きたて 拭きたて  
葺きたて 蒸したて 持ちたて 焼きたて

とりあえず自動詞によるとした七語の下にはアステリスクを付けた。それに対して他動詞によるとした語は廿一である。

これによって、現代の辞書編者の語感や判断の傾向がおおよそ窺われる。

ところで、「たて」は、辞書に引かれた用例のいくつか、そして見出しにおいても漢字表記は「立」である。しからば、接尾語「立て」は何に由来するのだろうか。まず考えられるのは、文語の下二段動詞「立つ」の連用形である。そこで、小学館『古語大辞典』(1983)の「たつ」の項から接尾語の部分を引き。

四〔接尾タ下二型〕(動詞の連用形に付いて) 顯示・反復・十分の意を添える。「着給へる物どもをさへいひ―・つるも、物言ひさがなきやうなれど」へ源氏・末摘花「おほくの工(か)の心を尽くして磨き―て」  
へ徒然草・一〇〇 F

つづけてこの項目に添えられた「語誌」を引く。

「立つ」は「たて（縦）」「たたさま（縦様）」などと同源の語で、縦にまつような状態になるの意が原義であろう。これが下から上に向かって現れ出るような意となり、さらに見えなかったものが表面に現れるような意味を持つに至ったものであらう。（山口佳紀 F）

平安時代から行われた接尾的他動詞「たつ」であり、語誌の記述も妥当だとわたしは考える。当面の「たて」の「直後」の意は、ここにいう「顕示・反復・十分の意」のうち、特に「顕示」の意に依るのだらう。だが、これらの用例の中に、確かに直後の意味を示していると考えられるものは見あたらない。

直後の意の「たて」のほかに、さまざまな語に付いて、やはり「立て」と表記されることの多い「だて」がある。同じ辞書からその項目を引く。

だて「立て」（接尾）（名詞・動詞・形容詞の語幹などに付いて）殊更にその形やふりを見せる意を表す。…のふりをする。こと。…ぶること。「ただ一人交じり給はざりつれば、賢人—かと思ひて侍りつるに」へ著聞集・博奕「そはへ寄りをつそと言ふに、なぶり—を

しをつて」へ虎清本狂言・蟹山伏「まだ侍—をしをつて」へ山本東本狂言・二人大名 F

動詞に接尾した第二例「なぶりだて」は、接尾的他動詞「たつ」で見た「十分」の意によると解釈できる。名詞に接した第一・三例は「顕示」の意の用法と見てよいだらう。多くの用例が拾える抄物、それに『日葡辞書』によっても、語頭が濁音「だ」であることは確かであり、現代にもつながる。なお、この意の用例は鎌倉時代までしかさかのばれない。

以上、辞書の記述を概観した。

## 二

この問題を正面から考察した森田良行（1980, 1986）がある。まず、森田（1986）の冒頭部分から引く。

自動詞に付いた例も若干あるが、多くは他動詞について、その他動行為が終わったばかりの意を表し、結果的に、他動行為によって生じた事物が、生じて間もないこと、まだ新しい状態にあることなどを表す。

ここに初めて、他動詞に下接するのが本来の形だとする説が登場したのである。要点はこれで尽きるのだが、森田氏はつ

づけて、この語が動詞「たてる」に由来することを述べ、「静止している事物に活動を与えたり、その結果、事物を新たにある状態や位置に持っていく、固定させること」からの発展と解釈している。「立つ」の具体的な動きを重視したこの説明は、もう一步抽象化した意味で捉えようとしたFの山口氏の説明とは微妙に異なる。とまれ、森田氏は直後の価値の存否に着目し、「産みだての卵」には価値があるからこう言うが、人間の赤ん坊には出生後の経過日数に価値的意義はないから、「産みだての赤ちゃん」とは言わないのだとする。「自動詞に付いた例も若干ある」ことに關しては、「その自動行為の実現によって行為主体に何らかの意味が結果的に生ずる場合」として、「結婚したて／入学したて／就職したて／上京したて／留学したてのころ」を挙げている。森田氏は触れていないが、すべて漢語サ変動詞による表現であることに注意しておこう。

森田氏はまた、「価値的意義」には、時の経過によって、プラスとマイナス、二方向の変動がありうるという。「産みだての卵」「買ったてのシャツ」はマイナス方向に変動する。「留学したてのころはまだ英語がうまく話せなかった」はプラス方向への変動、「留学したてのころは希望と野心を持つ

ていたのだが……」はマイナス方向へのそれだという。時には両方向が考えられる他動詞がある。「塗りだてのペンキ」では、塗布直後に触れて手や服を汚す恐れのある塗布面がやがて乾くことはプラス方向であり、艶やかな色が次第に褪せていくのはマイナス方向だという。

価値の変動という視点はわかる。だが、「塗りだて」「留学したて」の両方向性は、文脈による意味の違いと解釈すべきだろう。そこで、森田(2008)では若干の修正を施す。すなわち、「ペンキ塗り立て」「もぎだての茄子」「炊きたてのご飯」を例として、

その行為の結果が、後に残る事態として生じたばかりで、まだ新しさを失っていないことを際立たせる言い方である。と定義される。少し長くなるが、さらに次のように補足している。

したがって、結果が後に残る意志的行為に用い、自然現象や非意志的行為「降りだての雨」とか「生まれたての赤ちゃん」「煮えたての野菜」はもちろん、意志的結果の残らぬ現象「東京へ来たてのころ」などとは普通言わない。

ここには判断の揺れが見られる。すなわち、先に引いたように、行為主体に何らかの意味が生ずる場合の一つとして、「上京したて」を挙げていたからである。自動詞に分類される「来る」は意志的行為であり、「東京へ来たて」に結果が残っていないとは言えないだろう。以前よそに住んでいた人が上京して、いま東京の住民という結果が残っているからである。同じように「留学したて」には、「留学生」という結果が残るはずである。

右に見た森田氏の主張の要点は次のようになる。

態(14)の条件……他動詞

意味の条件……結果が残る動詞

意志性の条件……意志動詞

森田氏の記述では、態の条件すなわち他動詞であることが最も重いように見うけられる。それが、冒頭に引いた我妻氏の指摘と合致するのは興味あることだが、森田氏の説明では現代語の辞書の用例を十分に説明しきれないことも明らかである。そこで、この形式において、三つの条件がいかに関与するか、ほかにどのような条件が関わるかを考えなくてはならない。

### 三

江戸時代以前の用例を集めたいのだが、何せ対象の「たて」は接尾語なので索引による探索は難しい。やむなく多くの辞書類から拾いあつめることにした。厳密な文献批判を省き、表記を変更することもある。排列は初出の年代順として一語につき一例だけ挙げ、複数の用例があるばあいはその末尾にアステリスクを付す。諸辞書の掲げる用例に重なるものが多いのは孫引きらしいので、書名を明かすことはしない。

1 やうの火とは、すみのおこりたてのひをいふなり

(大諸礼集 1546) \*

2 きぬわをりたては白ぞ。のちに色々にそむるぞ (玉

塵抄・六 1563)

3 采は山からきつてとりたてのままの木ぞ (玉塵抄・

九 1563) \*

4 御ひさげにくみたての水、あい二つそひてまいる

(御湯殿上日記・天正十五年 1587)

5 ツキタテノモチ (日葡辞書 1603) \*

6 まだ売りもせぬ飴の練りたて (東海道名所記 1660

## 頃

- 7 胸は煙の蒸したてをまく（飛梅千句 1679）＊
- 8 生れたてからつちふまず、銭の数しらず（好色訓蒙 図彙 1686）
- 9 研ぎたての鎌の刃ためす柳かな（俳諧曾我 1689）＊
- 10 赤いぞや愛染様の作り立て（雑諧・住吉御田植 1700）
- 11 取たての肴一月置に食（柳多留・十 1775）＊
- 12 今おきたてのしやがれごゑ（二蒲団 1802）
- 最初の用例1を見ると、自動詞に接する形も長い歴史のあることが知られ、森田氏が言うほどには単純でないようだ。結論を導くにはあまりにも乏しい数ではあるが、自動詞が1・8・12の三語、残りが他動詞で九語、用例数では四例と十四例で他動詞に偏る。すべて結果の残存を表現した文脈に用いられている。
- 3は、動詞の部分で「切る」と「取る」に分けると、11の「取りたて」と同じになるが、「山から」が「切って取る」に係ると考えた。すると、4の「御ひさげに汲みたての水」において、「汲み」が「御ひさげに」を受けている構文に通ずる。すなわち、3と4において、「たて」の下接した語は、

補語を受ける点では動詞、連体助詞「の」に続く点では名詞という二重性を有することになる。「汲み」はいわば動名詞であることを意味する。これは、接尾語「たて」が動詞「たつ」から転じたと推定する一つの根拠になるだろう。

8の「生まれたて」は非意志動詞に付いた例である。この類の自動詞による用例には、語形の揺れの考えられるものがある。『日本国語大辞典』第二版の「うまれたて」の項には「（「うまれだて」とも）」の付記があり、「うまれだち」の項には「生まれて間もないころ。生まれたて」の語義記述がある。そこで、その両項から用例を引いてみる（表記を変更することがあり、既出資料には年次の表示を省く）。

## 《生後間もないころ》

- 13 吾うまれたちからはてまでをしるいだぞ（玉塵抄・六）

- 14 ウマレダチニ ウマレダチノコ（日葡辞書）

- 15 うまれだてからつちふまず、銭の数しらず（好色訓蒙 図彙）

- 16 此娘むまれだちより品をやりて、ただならぬ粧ひ

- （傾城禁短氣 1711）

- 17 生立うまれだちから親はない。子が年よつては親と成（女殺

油地獄・下 1721)

18 ウマレタテノコ (和英語林集成初版 1867)

《生来の性質》

19 其人のうまれ立にもよるぞかし (無事志有意 1798)

20 それでも生立ウマレダテの悪い野郎なら (浮世風呂・二上 1809-13)

21 産れ立ウマレダテにて直らぬことなら (霜夜鐘十字辻筈・三 1880)

19は「うまれだち」の項に挙がっているが、読み仮名はない。13から21までを見ると、タチ／タテ／ダテ／ダチと語形の揺れていたことが分かる。この四者についての考察を展開する余裕はないので、直後の意の「生まれたて」の成立には他の要素も関与していたかもしれない、という推測を述べるにとどめる。

語形の揺れは「成りたて」についても言える。同じ辞書の「なりたて」の項には「①なつて間もないこと」「②そうなた由来。原因。なりたち」とあるので、両形を合わせて掲げる。

《由来・原因・成り立ち》

22 楊朱がなりたてこまかなことは列子にあるか (玉塵

抄・六)

23 キンドノノ ナリタチ、ソノ ムホンノ ヤウヲモ

ヲカタリアレ (天草本平家・三 1592)

24 ナリタチへ訳あるものの経過、継続、そして状態

(日葡辞書)

25 我身のなりたちをも不知 (四河入海・廿 1700前)

26 親方分限のなりたてを語りけるに (日本永代蔵・五 1688)

27 それがいこのなりたてをきくに (役者口三味線 1699)

1699)

28 身元なり立、偽らず、具さに申せ (松風村雨束帯 鑑 1707頃)

「成り立ち」と「成りたて」は別語とするのが、現代人の感覚であろう。28は漢字表記であつて、「なりたち／なりたて」のいずれか判断できない。

12までの用例にはなかったが、現代語の文献に「出たて」として散見する語が、中世には「出たち」とあることを、左記の例によって指摘しておこう。

《始まり・第一歩・出はじめ》

29 たやすく彌陀の浄土へまいりなんずるための出立でたちな

り（蓮如御文章 1461-98）

30 私は、まだ学校を出たての勉強さかりの頃（宇野浩

二・蔵の中 1918-19）

31 この土地では出たての芸者は新妓（徳田秋声・縮

図 1941）

こうして見ると、自動詞に付いた「たて」と見える用例の中には、「たち」との間で揺れていたものが混じっている蓋然性が否定できない。

#### 四

視点を再び現代語に転ずる。新潮社（1995）によって、直後のへ動詞十たての用例を検索した。若干の見落としはあるだろうが、おおよその傾向は判断できと思う。全用例数百四十。その内訳は、他動詞に接したもの七十四、自動詞に接したもの六十六。比率はほぼ九対八で、中近世に比べて自動詞の使用が多くなっている。細かく見ると、へ自動詞十たてを多く用いる特定の作家・翻訳家があって、全体の自動詞使用率を高める結果になっているようだ。

自動詞の語例が二つ以上あるものを表示する。語例が上段、

用例が下段である。

	自動詞										他動詞									
小林正訳「赤と黒」	5	5	1	1	3	3	4	4	4	2	2	1	1	6	6	0	0	2	2	2
山本有三「路傍の石」	5	7	3	3	7	3	4	7	4	3	3	4	2	6	4	3	2	2	2	2
北杜夫「楡家の人々」	1	7	3	3	7	3	4	7	4	3	3	4	2	6	4	3	2	2	2	2
曾野綾子「太郎物語」	1	7	3	3	7	3	4	7	4	3	3	4	2	6	4	3	2	2	2	2
工藤精一郎訳「罪と罰」	1	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
阿川弘之「山本五十六」	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
木村浩訳「アンナカレーニナ」	2	3	4	4	3	3	4	3	4	3	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4
林芙美子「放浪記」	2	2	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
村上春樹「※」	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
井上ひさし「ブンとラン」	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
青樹繁一訳「沈黙の春」	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

※世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド

自他の類別に迷った語がいくつかある。九語十八例の漢語サ変動詞である。漢語サ変動詞は自他について両義的だからである。それを書き出して用例数を添える。

結婚する 5 卒業する 3 開業する 2 開院する 1

入院する 1 入局する 1 除隊する 1

これらの動詞によって述べられる事態は、結婚によって既婚者に、卒業によって卒業生に、開業によって開業医になるというように、行為者に明らかな結果が生じている。森田氏が、自動行為の実現によって、行為主体に何らかの意味が結果的に生ずるばあいには「たて」が付く、とした条件に合致すると言えよう。よってこれを自動詞の分類としておく。

残る動詞は二語のみである。

洗濯する<sup>3</sup> 散髪する<sup>1</sup>

「洗濯」は連文の熟語ゆえ、「洗濯する」は「洗う／濯ぐ」に等価と見なしうる。「散髪する」は「髪を刈る」にほぼ等価であると言えよう。これらは直接受動態になるので他動詞とする。

以上の処理によって最初に示した用例数を修正すると次のようになる。

他動詞	漢語サ	変動詞	自動詞
	洗濯・散髪類	結婚・卒業類	
74	4	14	48

残る自動詞は、複数用例のある「生まれる」「できる」「な

る」「入る」「来る」「出る」「行く」と、一例しかないものを合わせて四十八例である。「生まれる」は、森田氏の言う意志的な行為でないという点でも、この用法には最も不適格な動詞かと思われる。だが、「生まれたて」の十例は最多で、しかも淵源の古いことは前節で見たとおりである。これらについては後述する。

以上、自動詞によると見えたこの形式の四分の一が、漢語サ変動詞という、現代語に著しい新しい表現によるもので、一概に自動詞とは言えないものであることも判明した。それにしても中世以前には「自動詞＋たて」が少なく、時代が下るにつれて増加するのは何ゆえであろうか。その複合語形成の仕組みを考えてみなくてはならない。

## 五

前節までにおいて、直後の意の接尾語「たて」は、下二段動詞「たつ」の「顕示」の意によって成立したものだろうという点、前項には動名詞<sup>動名詞</sup>と言える例があること、他動詞に接尾するものが多いこと、用例は室町時代以降に現れること、現代語の用例には漢語サ変動詞によるもののがかなり存すること

とを見た。本節では再び流れをさかのぼる。

平安時代に始まる接尾的他動詞「たつ」から派生した接尾語には、「たて」のほかに「だて」もあることを第二節で見た。その「だて」は、いま生産力を失って複合語として残るに過ぎない。その名詞形成の様相を既出の『逆引き広辞苑』で見ると、「罵りだて」「訳知りだて」「咎めだて」など十七語が得られる。現代語で「厳しい取りだて」の「だて」は強調の意味を、「隠しだてしてはいけない」の「だて」は負の意味を、それぞれ担って使い分けられていることは疑いない。鎌倉時代から用例の見えるこの「だて」の室町時代の様相について、『タリシ版エソポのハブラス』を論じた大塚光信(1983)がある。その「片目な鹿の事」の条の「心得ただて」の項に関する補注で、ダテに上接する和語名詞を見ると、「普通のもの」と「動詞連用形から転成したもの」があると見て、後者の例に、「デカシダテ」のほか、

- 32 何とて惣並ニ改候ハて念を入れたてなる帳の差越や  
うハ(加藤清正書状)

- 33 コレヲハ類ヲ引テ、物ヲ云タテテ<sup>ン</sup>カシマシイ<sup>ン</sup>  
(黄鳥鉢鈔・一)

- 34 人ハ我ヲロカニ、人ヲス、メダテヲスルト云ハウソ

(同右・十)

- 35 従横ハ序ノ時念比ニ申タソ、物ヲ云タテシテアルク  
物ソ(孟子抄・三)

を挙げている。これらでは一様に格助詞「を」による補語を取っている。これは「たて」の用例3・4と同じく、前項が動詞の機能を残すことを語っている。大塚氏は転成した名詞としているが、動名詞段階と見るべきだろう。

さて、大塚氏は「だて」の独立用法として、

- 36 手前才学之衆者何たる達なる儀をも可被仕候(毛利輝元覚書写古文書)

を挙げている。ここに至るとわれわれは、「伊達」の漢字が当てられる慣習ができた、もう一つの「だて」に注目せざるを得ない。やはりFから一部分を引く。

- だて【伊達】①豪奢に振る舞うこと。華美に装うこと。

またそのさま。「当世の」とて、遊女、ぬめり男のすぐれて夏の暑さに、袷ひとへ物など着をりて汗びたしになる」(仮名・ひそめ草・下) F

仮名草子「ひそめ草」は寛永年間の刊行だという。この項目の語誌には、語源説三つを挙げ、いずれが妥当か決定しがたいとあるが、右に見てきた(動詞+たて)形式から独立分離

して成立したものと断定していい、とわたしは考える。

これらの「たて」「だて」が、他動詞「立つ」から派生したことは確かであろう。そして、成立は鎌倉時代以降のことになるが、「たて」と「だて」に見られる意味の分化は、語頭濁音の減価機能がなお有効であったことを語るだろう。

「伊達」はさらに後れてその減価機能が減じた時期、社会の下剋上の風潮の中に生まれたと思われるが、それは本稿の範囲外の問題である。

次に考えるべきは、接尾語「たて」が、さらに言えばその前身の接尾語「たつ」が、何ゆえに他動詞を選んで接するか、ということである。その問題を東辻保和他(2003)によって検討する。東辻氏によると、「たつ(立つ・下二)」を後項にもつ複合動詞は百九語ある。その初めの部分を示すと、「崇めたつ」(今昔)、「明けたつ」(古今・和泉集)、「扱ひたつ」(宇津保)、「編みたつ」(蜻蛉)「射たつ」(今昔)といった具合である。

その百九語の中で自動詞を前項とするものは、「明けたつ」「枯れたつ」「並みたつ」「燃えたつ」の四語である。それぞれ依拠した索引によって五つの用例を検討する。

37 明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらし夜は螢のもえこ

そわたれ(古今集・十一)

38 あけたてばむなしき空をながむれどそれぞとしるき

雲だにもなし(和泉式部統集)

39 かれたて<sup>はち</sup>る蓮が古根かきわけて沢田のくろにすみ

れ花さく(堀河百首・顕仲)

40 すみよしの岸のまにまになみたつる松のひと葉に千

代はかぞへよ(和泉式部集)

41 堂寺ノ燈ヲ滅セル者ノ、无量劫ノ間、如此ク燃エ立

ル也(今昔・一)

これらを下二段活用<sup>トウシテ</sup>の他動詞とした索引編者の解釈は適切だろうか。私見では、37・38は四段活用「たつ」の已然形に「ば」の接した恒常条件、39・41は四段活用「たつ」の已然形に存続の助動詞「り」の連体形の接したもの、40は「波立つる」との掛け詞なので除くべきものである。よって、下二段動詞「たつ」を後項にもつ百九の複合動詞の中に、前項に自動詞をもつものはなかった、と言ってよいだろう。そしてこれは偶然の脱落なのではあるまい。

平安時代、下二段他動詞「たつ」の下接した複合動詞の前項はすべて他動詞であった。へ自動詞+立つ(他動詞)の複合動詞は存在しなかった蓋然性が高い。それは、日本語の

文法体系が、〈自動詞＋他動詞〉という構造の複合を避ける傾向が強かったからではないか、とわたしは考える。ちなみに同書は、〈自動詞＋立つ（自動詞）〉は百二十三語を載せている。

## 六

直後の意の接尾語「たて」は、下二段活用 of 接尾的他動詞「立つ」に由来するゆえに、他動詞に下接するのが一般であったが、この形式が成立した中世、すでに自動詞を取る例が散見された。成立時にしてそうだったのだから、この語形成において、時代が下るにつれて動詞の自他の制約が次第に緩むことは自然な成り行きであろう。その結果は第四節において新潮社（1935）に就いて見たとおりである。

「たて」が他動詞に接するといふ基本的な性質はなお維持しながら、自動詞に接する用例がかなりの数に上ったのはなぜだろうか。まず考えられるのは、ある事態に対する表現者の態度の違いである。例えば、一つの事態でも、それを出来させた人や行為に関心を寄せるばあいと、それによって生じた結果に関心を寄せるばあいとは、表現が異なつて当然で

ある。態（<sup>イデ</sup>）についてそれを見ると、行為者をも意識した「男が殺された」と、被行為者だけに注目した「男が死んだ」とは分かりやすい例であろう。ここには異なる動詞が用いられたが、一つの動詞について格を変えたと「長女を生んだ」と「長女が生まれた」となる。相（<sup>カギマヘ</sup>）が関わる形では、「朝食が作つてある」と「朝食ができてゐる」がそれに当たる。直後の意の問題に戻すと、行為者を前面に出した表現が〈他動詞＋たて〉、行為者が背後に退いた表現が〈自動詞＋たて〉だということになる。「起こしたて」に対する既出の「起こりたて」、「生みたて」に対する「8「生まれたて」が該当する。そこに生じた「物」に注目したいという表現者の意欲を汲むべきなのだろう。

次に考えるべきは、第四節で現代語の用例検索によつて六十二の用例があつた自動詞の性質である。その内訳は「とれる」「積もる」「解る」「会う」「出て来る」が各一例、「生まれる」十例、「できる」「なる」各八例、「はいる」七例、「来る」五例、「出る」三例、「行く」二例である。初めに一例ずつの用例がある五語のうちの三つを見る。

- a 鱈のたたきの方は、とれたてで、（『太郎物語』p. 276）  
b 地肌は積もりたての雪のように（『※』p. 618）

c 孵りたてのまま死んでしまった(『沈黙の春』p. 307)  
 いずれもこの形式には用いにくい非意志の自動詞で、a「とれたて」は、我妻氏が違和感を覚えて本稿の発端になった表現である。『太郎物語』には、対応する他動詞「とる」による「カキナのごまあえ……。とにかくとりたてだ。」(p. 88)、「採りたてのクレッソン」(p. 180)、「免許取りたての黒谷」(p. 188)が見える。三様の表記をもつ他動詞による「とりたて」を一方で用いながら、あえて「とれたて」を用いた意図がわたしにはわからない。と言うより、ここに「とれたて」を用いる必要はないと思う。なお、この作品には、自動詞による「学校へ入りたて」「来たての店員」「学生になりたて」もある。

bの「積もる」から導かれる他動詞「積む」は、現代語では語義のうえで対応するとはもう言えない。cはコマドリの生殖をめぐる異常な事態の記述に見える。「孵る」から導かれる他動詞は「孵す」であるが、難に注目している文脈で他動詞による「孵したて」は不適なので、自動詞「孵る」を用いたのだろう。かくてbとcについては、著者・訳者の視点であえて自動詞による表現を選んだ、というほかのことは考えない。

残る九つの動詞には、早津恵美子(1988)のいう無対他動詞という共通の特徴がある。すなわちこれらには、「とる」とれる」「切る―切れる」のような語尾変化で派生する自他の対応関係がない。「生まれる」は他動詞「生む」の受動態である。「なる」に対する「成す」は書き言葉である。「できる」に対する「でかす」は、たしかに対応する形で成立した他動詞だがすでに転義しており、現代口語で対応関係にあるのは「作る」か「する」である。「出る―はいる」「来る―行く」は方向が対義であるに過ぎない。「会う」に至っては、対応する他動詞がないばかりか、いかなる結果を行為者に残すかも推測しえない。

次いで、二語以上の用例があった作品・翻訳の実例を少し書き出そう。

- d 番頭になりたてのところ(『路傍の石』)
- e 社交界へ入り立てのところ(『赤と黒』)
- f 学校出たての真面目な青年(『山本五十六』)
- g この出来たてのはやはやの小説(『ブンとファン』)
- h 生れたてのサケ(『沈黙の春』)
- d・eでは、前項動詞が支配しているとみなす格助詞に二重傍線を付した。fには起点格の助詞「を」が潜在しているは

ずである。格助詞を受ける動詞が「たて」に続く形を原初の姿だろう、と先に推定したが、これを見ると、成立当初の形式を今も引きずっていることになる。h「生れたて」は、c「解りたて」と同じ翻訳に見える。これの初出は意外に早く用例8に見え、ほかに「生れたての子牛」（柳田國男「遠野物語」）、「生れたての小さな蛸」（堀辰雄「美しい村」）などがある。堀辰雄の例は、蛸の誕生する場面に立ち会うことなどきわめて稀なことなので、無理な表現と言うべきである。

「行きたて」にも一つ厄介なことがある。

i わたしのような行きたての者には、やぶ入りはないんだって（『路傍の石』p.376）

この「行きたて」を、わたしは初め「経緯、事情」の意で解した。その二ページあとに

j そのころの習慣では、奉公に行きたては、もちろん、給金はないし（p.378）

とあって、奉公し始めた直後の意とわかったのである。作品を前から順に読めば、こんな誤解は起らないだろうが、経緯の意の語「ゆきたて」と同音衝突の造語をする必要は認めたい。「行きたて」は正当な用法とは言えない。

このように、他動詞を用いる原則を踏み外し、いささか無

理してまで自動詞を用いるように書き手を突きうごかしたものの、それは一語化・簡潔性の魅力ではなからうか。直後の意を表わす語には、「たて」のほかに「ばかり」がある。iの直前に、少年の帰宅を待つ母親の心話「まだ行つたばかりなので、ことしはおひまが出ないのかもしれない」がある。こに見える「うばかり」と「たて」を対比させた簡単な考察が、森田氏の二著書にあり、「ばかり」は「たて」と違って、結果の残存の制約がなく、自然現象にも用いられて汎用性が高いむねの言及がある。だが、「たて」は動詞の連用形に下接するだけで一語化するのに対して、「ばかり」は一語化しないのみならず、動詞のタ形からの接続である。この二つの形式を並べてみると簡潔性の差は歴然とする。

はいりたての小僧……はいったばかりの小僧

入社したての大失敗……入社したばかりの大失敗

できたてのアンパン……できたばかりのアンパン

会いたてのころ……会ったばかりのころ

なりたての海軍軍人……なったばかりの海軍軍人

簡潔な表現への意欲が、若干の違和感を押しつけてあえて非文の形を選ばせた、とわたしは解釈する。

すでに見たように、当代の用例のうちの二割三分ほどを漢

語サ変動詞が占める。これは近代の特徴である。漢語サ変動詞は自他の両義をもつ語が多いので、そこにもへ自動詞＋たてへの増加する契機があつただろう。この傾向は今後さらに進むに違いない。漢語サ変動詞はまた、例えば「結婚する」を「結婚をする」のように分けて言うことも行われる。外国語なんかづく英語の学習で「目的語」を学んだ人が、「結婚——をする」と把握して、漢語サ変動詞を他動詞と錯覚することもあるだろう。そうになると、もう自他の別を意識せず、動詞全般に用いられるようになることが予想される。

## 七

「たて」の出自である接尾的他動詞「たつ」の後身、現代語「たてる」の様相を、姫野昌子(1996)によって見ておこう。姫野氏は、「たてる」による複合動詞はすべて語彙的複合動詞だとして、その意味特徴を、①直立(確立)、②顕彰・拔擢、③達成・構築、④強調・旺盛に分けた。第一節に引いた辞典Fが「顕示」とした意味は、②のうちの「顕彰」に近いと思われるが、②に所属する複合動詞は「引きたてる、盛りたてる、とりたてる、守りたてる」の四語だけである。

語構造は、①く③がへ他＋たてる〓他へ自＋たてる〓自の二つとする。自動詞を前項に取る形④の成立したところに大きな変質の跡が見える。

その④には、例文「人々が騒ぎたてる」のほか、「扇ぎたてる」以下四十一の複合動詞が挙げてある。そのうち、前項を自動詞とわたしが判断したのは、「急ぐ、叫ぶ、どなる、わめく、まくす、弁ずる、ほえる、鳴く、騒ぐ、はしゃぐ」の十語である。「急ぎたてる」以外は音声を発する動詞である。これらの自動詞が何ゆえに「たてる」と複合しえたのかを考えると、第二節で見た森田氏の指摘が思い出される。すなわち、直後の意を表わすへ動詞＋たてへの、「自動行為の実現によって行為主体に何らかの意味が結果的に生ずる場合」という記述である。姫野氏の挙げた「騒ぐ」など十一の自動詞によつて、何らかの結果が行為主体に生ずるということとは考え難い。この「たてる」が、平安時代以来の接尾的他動詞「たつ」から変身していることは明らかである。姫野氏が④の意味特徴を「強調・旺盛」としたことも肯なえるのである。

本稿では第一節以来、「たて」の出自たる「たつ」に、辞書類の記述の「接尾語」を用いず「接尾的他動詞」と書いて

きたのには訳があつた。本来の動詞性を残しているゆえに他動詞に下接することが原則であつた、という判断である。この語の歴史は、その動詞性の変質の歴史であつたと言えよう。④の用法を獲得した現代語は、もうためらうことなく「接尾語」と称していいと思う。姫野氏は、「たてる」が後項動詞として働けばあいは本動詞の意味が残っているとしたが、少なくとも、④にはその指摘がふさわしくない、とわたしは考える。

姫野氏の著書によつて見ても、他動詞は他動詞と、自動詞は自動詞と結合することの圧倒的に多いことが知られる。そのことは、日本語を母語とする人なら一様に納得できる語感だろうし、多くの言語に通ずる性質でもあるらしい。影山太郎(1993)は、そのことを指摘したうえで、そう言うだけでは不十分だとする。そこで、能格性の視点を導入して自動詞を二分する。

意図的行為を表す……非能格自動詞(働く、さわる、

起きる等)

非意図的行為を表す……非対格自動詞(ころぶ、生じる、

浮かぶ等)

動作主 (Agent) を主語に取るのが非能格自動詞、意図をも

たず受動的に事象にかかわる対象 (Theme) を主語に取るのが非対格自動詞である (p.42~43)。

生成文法の視点からすると、他動詞と非能格自動詞は同型の項構造と見なすことができる。そこで、〈他動詞+他動詞〉のほかに、次のような複合動詞が可能となる。

〈非能格自動詞+非能格自動詞〉…例、走り去る

〈他動詞+非能格自動詞〉………例、葬り去る

非対格自動詞の項構造はこれらとは異なるので、基本的には非対格自動詞どうしでしか結合しない。影山氏はこれを「他動性調和の原則」と称する (p.117)。このように視点を变えても、右の制限を受けない複合動詞は現実には存在するとして、影山氏は詳細な分析を展開していく。

能格性の視点によると、「とれる」「生まれる」「できる」など非意志の自動詞は〈非対格自動詞〉、「たて」は他動詞「たつ」に由来すると考えられた。すると、「とれたて」類は〈非対格自動詞+他動詞〉構造であつて、「他動詞性調和の原則」に抵触する。「とれたて」という複合は成り立ちにくいとする議論は正当であつたのだ。

## おわりに

さて、「とれたて」では新鮮さが感じられないという我妻氏の説明に戻ろう。氏は自身の違和感の由来を次のように述べている。

例えば、「柿のも（掬）げたて」よりも「もぎたて」の方がその柿が新鮮で立派であろう。すなわち、もげたばかりの熟しきった柿は、新鮮さを越して、もはや腐る方に近くなつたものであり、他方、「もぎたて」の柿は生き生きとしてまさに「もいできたばかり」のそれであるからである。

わたしたちの生活経験からして右の解釈に共感できる。「もげる」には大きな力を要せずに採れた印象があつて、成熟点に達したのちの収穫を含意することが多いだろう。「もぐ」には何ほどかの力を要した印象があつて、成熟点に達する前に採つたことを含意する。これを商品の流通過程に置いて考えると、後者に高い価値を見るのは当然であろう。

「とれたて」を用いた人々には、結果を残さない自動詞にも下接する、現代の接尾語「たてる」の④が作用したの

もしれない。それに対して我妻氏は、右のばあいに限らず、「たて」を使用するときは自他の別を考へるという。その意識下には、長い伝統に支えられた日本語話者としての直観が作用しているのだろう。

ただ、「とれたて」と言う人が「もげたて」とも言うかとなると、問題は微妙である。「とる」「とれる」は単独で用いて収穫・摘果の行為全体を指すことは当然だが、「とる」には、「折りとる、切りとる、もぎとる、掻きとる、摘みとる、刈りとる、むしりとる」などの複合動詞がある。これらにおける前項はすべて先行動作を指し、前後を入れかえて「取り折る」のようにには言えない。右のうち、初めの三つの複合動詞の前項には、対応する自動詞「折れる」「切れる」「もげる」がある。しかし、直後の意のへ動詞「たて」に自動詞を用いるにしても、「切れたて」「折れたて」「もげたて」は実現にくいのではなからうか。その形では、先行する動作、切ること・折ること・もぐことが目的である印象を与えてしまい、結果を含意して直後を意味するへ動詞「たて」にはふさわしくないからだろう。自動詞をつかいたい人でも、作業の終わりに「もげたて」ならぬ「とれたて」を用いるのはなからうか。

以上に述べたことを要約する。

直後の意を表わすへ動詞「たて」の「たて」は、接尾的他動詞「立つ」によって生まれた接尾語で、「立つ」のもつ頭示の意から直後の意を表わしえた。同じく「立つ」から派生した接尾語「だて」は、語頭濁音による負の意味を担って用いられ、「たて」と意味を分けあつた。上接する動詞は、意志をもつてなされ、行為の結果があとに残る他動詞を基本とする。成立の経過を反映して前項には動名詞と見るべきものがあつたが、それは現代語にも見られる。「たて」が他動詞に由来することが意識されにくくなり、漢語サ変動詞の活発化などの条件も加わって、自動詞を取る傾向が進んでいる。

平安時代、下二段動詞「たつ」が自動詞に接尾した複合動詞は見えない。これは自動詞と他動詞の複合を避ける傾向がある日本語の文法体系の制約によるのだろう。自動詞には承接しにくかつた「たて」生来の性質が、「とれたて」に対する我妻氏の違和感を呼びおこした、と解釈する。

本稿の概要は、七月四日に開催された本年度の成城国文学会で、「できたて・とれたて・生まれたて」と題して発表した。わたしは、近年猖獗を極める「立ちあげる」に強い違和感を覚える。だが、やはり耳目に接することが多くなつた

「花火が打ち上がる」類を逆形成 (backformation) とみなしてあつさり片付ける影山 (1996 p. 266) なら、これも同じ論法で処理するだろうか。その違和感の根拠を極めたいと考えるわたしは本稿の標題にその意図を籠めた。

#### 【文献】

- 我妻 建治 (2004) 「とれたて雑感」『成城学園報』二百十号
- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』(ひつじ書房)
- 同 右 (1996) 『動詞意味論』(くろしお出版)
- 新潮社 (1996) 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』
- 早津恵美子 (1998) 「有對他動詞と無對他動詞の違いについて——意味的な特徴を中心に——」(『言語研究』九十五号 日本言語学会)
- 東辻保和他 (2003) 『平安時代複合動詞索引』(清文堂)
- 姫野 昌子 (1998) 『国語複合動詞の構造と意味用法』(ひつじ書房)
- 森田 良行 (1980) 『基礎日本語 2』(角川書店)
- 同 右 (1996) 『意味分析の方法——理論と実践——』(明治書院)

(2004.9.30)